『海の向こうから考える桜ヶ丘キャンパス』
海外診療団奮闘記　～ベトナム口唇口蓋裂医療援助活動に参加して～

西原一秀・平原成浩・松永和秀・中村典史

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科　先進治療科学専攻
顎顔面機能再建学講座　口腔顎顔面外科分野

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科口腔顎顔面外科(以下，当科）では，2006年から毎年，ベトナム社会主義共和国（以下，ベトナム）の口唇口蓋裂患者に対する医療援助のためにベトナム南部ベンチェ省のグエン・ディン・チュー病院を訪れています。この医療援助は特定非営利活動法人口唇口蓋裂協会が主体となって，ボンランティアで口唇口蓋裂患者の手術や疫学的調査などを行っています。毎年，日本全国各地から40-50名の口腔外科医，歯科医師，看護師，麻酔科医，小児科医，学生などが参加しています。滞在日は移動を含めると８-10日間程で，手術や診療を３-４日間行い，休日には障害児学園や患者さんのご自宅の訪問，現地の医師，看護師との交流会などが催されています。今回は，その医療援助活動の内容やベトナムでの生活，他大学の先生方との交流の様子などをご紹介します。

ベトナムには鹿児島空港から韓国・仁川空港まで行き，仁川空港で他大学の先生方と合流してベトナム・ホーチミン市のタン・ソン・ニャット国際空港まで行きます。タン・ソン・ニャット国際空港からは大型バス１台と手術道具，器材等を積んだワゴン車３台でベンチェ省に向かいます。空港出発後に最初に驚くのは，日本では見ることのできない数のバイクが縦横無尽に走り，その中をバスがクラクションを鳴らしながらバイクを避けるように走って行く光景です。時には大人２人，子供２人の４人が乗ったバイクも走って行きます。ホーチミン市など大きな都市には信号機はありますが，地方に進むにつれ信号機はないので，現地のガイドさんから「道路を横断する時は，バイクは止まりません。決して一人で横断はしないようにしてください。また，ゆっくり歩いて横断しないとバイクがぶつかってきますよ。」といきなり注意されます。移動後，宿泊先のゲストハウスに到着するのは夜中ですが，毎年ベンチェ省の副知事をはじめ関係者の方々が待っておられ，この活動に対する期待感がわかります。到着

ホーチミン市のバイクの集団

フランスパン，フォーなどの朝食

後は，用意されたスープ，フランスパン，エビ春巻き，コム・チンなどのベトナム料理とビール，果物などで歓迎会が催され，部屋に着くのは大抵夜中です。宿泊部屋はほとんどが２-３名部屋で，クーラー，小さな冷蔵庫，シャワー，「蚊帳」付きのベッドが備わっており，比較的快適に過ごすことができます。しかし，たまに停電でクーラーが効かなくなることがあります。到着翌日から早速，手術や疫学調査などの活動が開始されます。１日目は手術室の準備と手術を待っている患者の術前診察です。現地の朝は早く，起床時間はだいたい５：30頃で，６：00から朝食です。朝食はフランスパン，フォー，オレンジジュース，ベトナムコーヒー，ミルクフルーツなどですが，フォーは，飽きないようにお粥，肉まんなどに変更可能となっています。料理は，付け合せに香草類がふんだんに使用されますが，匂いが気にならなければ美味しく食べられます。朝食後はグエン・ディン・チュー病院で手術室の整備(無影灯のガラス拭き，中古手術台の操作の確認など)や前年の手術終了後に倉庫に保管していた器材の搬出，搬入と手術機材の確認作業を行います。これは，毎年，手術のためにグエン・ディン・チュー病院の手術室を借りますが，原則的に現地病院の手術器材や衛生材料などを使用しないために日本から持参した手術器具や倉庫に保管していた消耗品を使用するためです。午前中に手術準備はほぼ終了し，その時ばかりは日頃全て揃っている日本の手術室の有難さを感じます。午後からはグエン・ディン・チュー病院の歯科・口腔外科外来で手術予定患者と新患患者の診察が行われます。毎年50-60名の患者が訪れ，手術を待っています。顔貌や口腔内写真を撮影した後に麻酔科医や小児科医，手術担当医の術前診察が行われ，採血，印象採得が手際良く進んで行き，この時点で手術が行われる患者が決

手術後のリカバリールーム

定されますが，残念ながら滞在期間の関係上，翌年に手術が予定される患者もいます。手術室は３室用意され，２つの大学の医師が交互に手術を行っていきます。これまで，われわれは獨協医科大学歯科口腔外科や北海道大学口腔外科の先生方と一緒に手術を行ってきました。手術は１つの手術室で１日４件が予定され，３室が朝から同時進行していくので１日12件の手術が行われることになります。手術内容は口唇形成術，口蓋形成術を主に，瘻孔閉鎖術，口唇修正術など多岐にわたります。現在，医療機関や保険制度の整った日本では口唇口蓋裂関連の手術は適切な時期に行われますが，未だにベトナムでは大人になるまで未手術の患者が見られます。しかし，この医療援助活動が長期に亘って行われてきたために最近ではそのような患者も減ってきたように思われます。２日目以降は，手術が本格的に開始され，われわれが朝，手術室に到着した時には手術棟の玄関には昨夜病院で過ごした患者さんたちが，座って待っています。１例目の手術患者はそのまま手術室に直行し，麻酔の導入が始まり，８：00には手術

暗い無影灯下での手術

病棟回診

が開始されます。２例目以降の患者は recovery room で点滴をされ順番を待ちます。手術後は recovery room で一夜を過ごし，翌日，体調が良ければ，点滴を抜去して歯科口腔外科病棟に転棟します。手術日の昼食は，空き時間に病院の食堂で取ることになります。やはりフランスパン，フォーが主ですが，フォーは毎日違った種類の具材で，フルーツもたくさんありますので，とても美味しく頂くことができます。しかし，たまにドリアンやホ・ビ・ロ（Hot Vit Lon，アヒルの有精卵を孵化する直前にゆで卵にしたもの）などが置いてあるのでびっくりします。ドリアンは臭く，ホ・ビ・ロはジャリジャリとした毛のついたゆで卵の味です。お味は想像にお任せします。このように食事以外はほとんどを手術室で過ごし，全ての手術が終了するのは20-21時頃となります。手術終了後，全員が揃ってゲストハウスで夕食を食べ，簡単なミーティングを行い，シュワーを浴びて寝るのは毎日12：00頃です。とてもハードな日程ですので途中で体調を崩し，点滴をうけるスタッフもたまに居ます。また，３日目からは手術の合間をぬって，術後患者の病棟回診が始まります。病棟は全部屋４，５名の大部屋で，幼児と大人が一緒に過ごしています。患者は硬い木枠にゴザをひいたベッドに寝ており，ベッド間に吊されたハンモックで寝ている幼児もいます。われわれが回診に行くと喜んで，大きく口を開けて見せて下さる患者もいますが，やはり子供は泣きます。これは，万国共通のようです。

ベンチェ省の役人やグエン・ディン・チュー病院の医師，看護師さんとのパーティーは，毎年水上レストランで開催されます。日本の女性の皆さんはこのパーティーのためにゲストハウス到着後にオーダーメイドで色とりどりのアオザイを作ります。もちろんグエン・ディン・チュー病院の女性の皆さんも着てこられ，パーティーはとても華やいだ雰囲気です。ベトナム語は解りませんが，言葉が通じなくても会話は「こころ」と「body language」が最も大切と再認識し，ベトナム料理の食べ方などを聞きながら楽しい時間を過ごしています。また，ベトナムは８割が仏教徒で，１割程度がキリスト教徒だそうですが，ゲストハウスの近くに協会があるためクリスマス・イヴは結構な人数の若者がバイクに乗って集まってきます。教会はたくさんの人で賑わい，風船などの夜店も見られ，子供たちはサンタクロースの格好をし，賑やかさは日本と同じです。現地の人々の胃袋を満たす市場に買い物に行くことも楽しみの一つです。新鮮な野菜や果物，魚介類（蛙が飛び跳ねています），米，雑貨が処狭しと並べられ，その市場内を人々はバイクに乗って買い物をし，笑いと活気にあふれています。患者さん宅の訪問では，初年度はバナナ園を経営しているお宅にお邪魔しました。ジャングルを15分程歩くと，突然壁のない家が現れてびっくりしました。台風で壁が飛んで修理が終わって

豊富な果物や魚介類（蛙）

バナナ木の枝で作られた家

いなかったそうです。ご家族は屋根しかない家で生活し，用水路の水を浄化した飲用水を使用していました。隣の家はバナナの木の枝で作られた家でした。しかし，集まってきた子供たちの笑顔はとても明るく印象的でした。最終日は，後片づけ終了後にホーチミン市に向かい，帰国の飛行機が０：15発のため夕食の慰労会までは自由時間が設けられています。初めての参加者はホーチミン市内の戦争証跡博物館や統一会堂，中央郵便局，サイゴン大教会などを観光し，やや年配の方々はマッサージなどで疲れを取ります。

このようにベトナムでの口唇口蓋裂医療援助はとても忙しく，慌ただしい活動となります。しかし，手術後に患者さんやその家族が笑顔で会いに来てくれると，とても嬉しく，今後もこのような医療援助活動を続け，他の海外の発展途上国にも活動の場を広げていければと考えています。

最終日の患者さんたちとの集合撮影

最後になりましたが，このような機会を与えて頂き，毎回快く送り出して頂く口腔顎顔面外科の医局員一同に深く感謝致します。